

## パネラー紹介

ディスカッションに入る前に、お互いを知るために他己紹介を行いました。自己紹介ではなく、他己紹介。お互いの事を話し、聞きだして、「〇〇さんとはこんな人ですよ」と、他人を紹介する…というものです。

- ・どのような「思い」で関わっているか？
- ・現在の活動の課題は？

という点をまじえながらお互いを紹介していただきました。

### Oさん 理事・エクラガイドボランティア委員長

主婦、ピアノ講師。  
小野市に恩返しをする意味でボランティアをされています。ボランティアとして、「地域の方とどう関わっていくか？」「北播磨という大きな地域に何をどう発信していくのか？」という課題をお持ちです。

### Gさん 理事、広報委員長

寺院住職。  
実際にボランティアをする個人のスタンスは熱く、楽しく。アルシェの理事としてのスタンスは、冷静に全体を見渡せるように。という気持ちで関わっておられます。みんながいかに楽しく活動ができるか？活動の資金をどう捻出するかが課題であるそうです。

### Sさん 伝統芸術系事業の実行委員会代表

書店店主。  
歴史にかかわる事業において、自分ができることであれば何でもやっていきたいとお話になりました。実行委員会のメンバーは団塊の世代以上の方が多く、もっと年齢層を広げた活動をやっていきたいという思いを持っておられます。

### Nさん 理事、梯剛之ピアノリサイタル実行委員会代表

主婦。  
エクラホールを活用して、北播磨に音楽の素晴らしさを発信していきたいという思いを持って活動されています。日常を離れた癒しの時間を提供できれば…と考えておられるそう。他市、他町への情報発信をいかにしていくかが課題だということです。

### Fさん 評議員、みんなのエクラ委員長

建設業。  
心身ともに明るい豊かな社会を創っていききたいということです。人、社会を活性化したいというFさんの課題はもっぱら、自身のエネルギー不足だそうです。

言からはボランティア活動に関わる人がしばしば感じる、「モチベーションをいかに高め、維持するか」「役割分担をどのように行なうか」ということに葛藤や課題を抱えている様子が透けて見える。

## 4. コミュニケーションの回路

法人という組織内のみならず個々の活動やメンバー間でも、時としてコミュニケーションが十分でないことがこれまでの発言から分かった。アルシェとはいったい、どのような流れで意思決定がなされるのだろうか。オブザーバーの事務局からは次のように説明がされた。

「理事会と理事評議員会があるが、指定管理者として事務局サイドで判断する事項と、理事の皆さんに相談しなければならない事項があります。そして、理事会、理事評議員会の開催数は他のNPOより多いと感じていますが、議題が余りにも多いのでその議案を消化することで精一杯であるので、ヨコの連携が取りにくいということは感じています。各委員長の集まる会議が出来れば、と思っています」(事務局)

2007年1月発行の「アルシェ・レター」Vol.8を開くとイベントスケジュールが載っている。1月に「school楽演祭」、3月には淡路人形芝居、4月になると梯剛之さんのピアノリサイタルなど。アルシェとしては小野まつり・小野市男女共同参画センター・小野市国際交流協会といった事業も受託している。事務局の多忙さが想像されるけれど、それらは理事会での検討事項の多さやマネジメントの難しさにもつながるのだろう。

パネルディスカッションでも次のような指摘がされていた。

「サポーターについては2ヵ月に1回集まりを持っているけど、なかなかサポーターの集まりが芳しくない。そうすると委員からサポーターに対して一方的な指示になってしまっていて、サポーターの声を聞くことが難しくなっている」(Kさん)

様々な分野の方と接する機会が多く、自分自身にはプラスにはなっているが、組織が大きくなるにつれて、他の方や、他の委員会が何をしているのかが見えにくくなってきている。(Hさん)

## 5. 活動のひろがり組織

現状では、大事だと分かっている「事務局スタッフは忙しすぎないか？」「ボランティアは今の活動に満足しているだろうか？」という、互いへの目配せと心配りが行き届いていない可能性もある。もしそうであれば理事会や評議員会とは違う、ボランティア同士が集まれる機会や事務局スタッフと定期的に情報交換を行なう「共有のテーブル」が必要となるだろう。

パネルディスカッションでも次のようなやり取りがあった。

菅——情報の共有というのは大切なことですが、ただ単にお互い持っている情報を持ち合うだけでは無く、意識の共有にもなると思います。理事の皆さんは情報の共有ということについてどう考えておられますか？

Kさん——理事会で情報の共有はできていないと思います。理事会のあり方がそうではなかったし、余裕もありませんでした。これからは理事会、理事評議員会のあり方を考えないといけないと思います。今回のこのパネルディスカッションは良いきっかけになりました。

Oさん——私は「開館してまだ2年か」という心境です。ヨコのつながりを造るのは今からだと考えています。

菅——同じ法人の中で、経営運営を考える人とそうでない人の温度差をどこかで埋めないと、エクラにとってもアルシェにとってもマイナスになるのではないのでしょうか。「エクラとは何か？」「アルシェとは何か？」と考える場がどこかに必要だと思いましたが、いかがでしょうか？

Oさん——それが、まさに今日のこの場ではないでしょうか。

さらに理事でもあるNさんは、「理事会、理事評議員会は今までは唯一、情報を集めることが出来る場であったと思います。これからは各委員会の代表者会議を持つことが大切だと思えます」という提案もされていた。

一連の発言を糸口に、これまでの議論も振り返りつつまとめてみたい。

事務局や広報委員のみならず、パネルディスカッションに出席された理事や実行委員の方は共通して、「組織内のコミュニケーションやヨコの連携は円滑に行なわれていない」と感じている。ほかにも多くの問題提起があったものの、共通して言われるコミュニケーションということが今のアルシェにはとても大事な問題なのだろう。筆者には、実は誰も気が付いていたことがこれを機に表面化したと感じられた。

それでは、どこに問題があったのか。アルシェの設立、指定管理者制度に基づくエクラの受託、実行委員の立ち上がりイベントの開催—エクラという施設を核にしてこの4年間、アルシェが発展・拡大していった経緯がこれまでに示した数字からも分かる。けれども、活発な事業展開の一方で、徐々に理事会だけでは大きくなった組織に関わる全ての問題を解決出来なくなったのかもしれない。

もちろん、それら意思決定機関自体に問題があったのではない。人間で喩えるなら、成長期には身体だけでなくその思考やライフスタイルまで日々刻々と変化していくように、急速かつ多様に発展する活動に組織のありようが追いつかなくなったことに原因を見出すことが出来よう。パネルディスカッションを通じてすでにメンバーの中から提案が始まっているので、新たな場の創造が課題の解決につながると思われる。

### Mさん シューベルティアード小野実行委員会メンバー

会社員。  
シューベルティアード小野が認められるよう、また音楽が好きな人が増えることが目標。今年度はまちかどコンサートを開催するという新しいチャレンジが行われます。

### Kさん 理事、子育て支援委員長

主婦。  
託児活動のみならず、障害者の方への支援を視野に入れて活動されています。委員会メンバー、託児サポーター、参加者の思いが同じであれば事業としては成功するのではないかと考えておられます。

### Hさん 評議員、例会委員長

大学講師。  
この団体で自分は何が出来るのか？何が出来ているのか？を日々自問自答しながら活動されているそうです。例会の機能の難しさを実感しているとともに、「メンバー間のつながりをどうやって強くなるか？」「市民に認められるNPOとはどんなものなのか？」という課題をお持ちです。

## あわりに—

パネルディスカッションの終わりに筆者は、アルシェを「葡萄の木」と表現した。ボランティアや実行委員という「房」が集まって、やがて一本の木を構成するのだと。それに対してある出席者は「アルシェは箱舟です。バラバラなことをすると舟は沈んでしまうかもしれない」と言われた。どちらの比喩が正しいかは分からないけれど、どんなときでもそこに関わる人が同じミッションと自立への志向を持ちつつ、役割分担と課題の共有を常に意識することが大切だと思う。そして北播磨の市民活動を支えるアルシェがどんな未来予想図を描くのか、地域は大きな期待を抱いている。これからも箱舟の行く先に目が離せない。(了)

## DATE

### NPO法人コミュニティサポートセンター神戸(CS神戸)

神戸市東灘区住吉本町2丁目13-1森田ビル3階-4階

URL:<http://www.cskobe.com/>

「東灘地域助け合いネットワーク」を母体に「自立と共生」に基づくコミュニティづくりを支援するサポートセンターとして1996年10月に発足。  
「共生循環型のまちづくり」や「NPO手法によるコミュニティ事業」を行う団体立ち上げや運営を支援されています。